

26) 「備急千金要方」における口臭症治療について

Treatment of Oral Malodour in “Bei Ji Qian Jin Yao Fang” (備急千金要方)

鶴見大学歯学部 佐藤恭道, ○大熊 毅, 別部智司, 戸出一郎, 雨宮義弘

Yasumichi Sato, Takeshi Ohkuma, Satoshi Beppu, Ichiro Tode and Yoshihiro Amemiya

Tsurumi University, School of Dental Medicine

今や日常生活におけるエチケットとして気を配らなければならない状況となってきた口臭は、古くから人々の関心事であったようで、古代フェニキア人は貿易によって香料を得て、口臭除去にも用いていたといわれている。医聖ヒポクラテスもその著書の中で口臭に対してアニス、イノンドの実、没薬、ブドウ酒などを含んだ含嗽剤を推奨している。日本では平安時代、丹波康頼の著書「医心方」には10篇におよぶ文献からの引用が認められる。また平安時代後期の成立といわれている「今昔物語」には口臭についての説話が認められる。今回我々は「備急千金要方」(以下「千金方」)における口臭治療に対する処方について検索したので報告する。

「千金方」は7世紀中ごろ(652年)唐の孫思邈によって編纂された全30巻から成る医学全書である。漢から隋、初唐の医説や治方に著者の意見を加え、病理、湯液、鍼灸から按摩、呪術などにわたり簡明に記載されている。

口臭症治療は巻六、七竅病方、口病第三に又方を含め29方、唇病第五に4方記載されている。この中には口臭を消すだけでなく、芳香にする処方や、衣服の臭いや体臭を消す処方まで記載されている。齲蝕や歯周炎について述べられている歯病第六が38方であるのに比べて、口臭については比較的多く記載されていた。当時の人々が体臭も含め、口臭に対しても気を使っている様が見える。構成生薬は沈香、安臭香、甲香などの香料や、藿香、甘松香など芳香性の強い健胃薬など多岐にわたっている。また現在でも口中清涼剤に配合されている丁香(ユーヅノール)や香辛料として用いられている豆蔻(ナツメグ)、鬱金(ターメリック)なども用いられている。千金方の薬剤は概ね陶弘景の「集注本草」に基づいており、白芷、藁

本、沈香など主な構成生薬の記載は同書によるところである。しかし零陵香や丁香、薫陸香などは「千金方」の時代から薬として用いられて来たのであろうが、唐代の「新修本草」や宋代の「開宝本草」「証類本草」から記載されている。特にこれらの貴重な香料は当時の皇帝の権力や、いわゆるシルクロードを経て西域諸国との交易が盛んに行われたことを反映するのではないかと考えられる。また「千金方」の後代への影響も強く、「外台秘要方」では口臭方として9方中「千金方」から8方の引用がある。また「太平聖恵方」にも同様の処方が多く認められる。

現在では口臭を抑制する薬剤として希過酸化水素水やメトロニダゾールなどが用いられている。しかしほとんどの口臭治療薬はペパーミント、スベアミントなどの香料が用いられ、香料のマスキング作用に頼っている。つまり口臭抑制効果はあくまで一時しのぎにすぎず、香りが消えるとその強い香りの下に隠されていた口臭が戻ってくる。近年、わが国では洗口剤市場が急速に拡大し、口臭に対する社会的関心が高まってきている。口臭に悩む人々は少なくなく、症例によっては自殺に至る場合もある。口臭の原因が生理的には硫化水素、歯肉炎や歯周炎などではメチルメルカプタンによるものであると判明しても、口臭除去は古代から相変わらず香料に依存している。社会環境の変化とは無関係に古代から口臭が人々の大きな悩みであったにもかかわらず、それぞれの時代でその治療に携わる歯科医師が少なかったように感じられる。

「千金方」における口臭症治療は、多くの処方を記載し、後代の「外台秘要方」「太平聖恵方」などにも影響を与えたものと考えられる。